広辞林

第六版

三省堂編修所 編

三省堂

広辞林

第六版

三省堂編修所 編

三省堂

© 1983 Sanseido Co., Ltd.
Sixth Edition 1983
Made and printed in Japan at the Sanseido Press, Tokyo

まえがき

言語は時間とともに変遷する。変遷の様相は多様であり、同時に法則的ではあるが、その速度は、長い歴史の中で、時期により必ずしも一定ではない。音韻をはじめとして文法・語彙はもちろん文字や表記に至るまで、およそ言語現象のすべて、変遷の埒外ではないが、その変化はこれまた必ずしも併行的には起こらない。言語を用いる個性すなわち人間が、次々に生起消滅し、あるいは各地域へ分散集中し同化する中で、また、異文化との接触の過程で、社会生活・文化的創造等における人間の言語活動の結果として、言語は常に静かに変化していく。速度を早める要因に若者たちがおり、年輩者から言葉の乱れと顰蹙をかい、言葉を正そうという力が変遷の速度をゆるめる。その両方の力の均衡が少しずつくずれ、言語は変遷する。従って実は、言語が自ら変わるのではなく、その使用主体たる人間の生々しい営みの中で、人間が変わり、人間が言語を変化せしめるのである。

人間が移ろい、言語が変遷する中で、なおかつ言語にはしかし変わらざる部分も少くない。微妙なずれがないとは常に断言はできないが、基本的には変わらざる部分がむしろ多い。ここに、現代に生きるわれわれを、言語文化の上限である古代にまでつなぐ直接のきずながある。現代の文化の後背地としての過去に、われわれは言語を通じてむすばれている。

こう考えるとき、およそ辞書には、その編修の性格に、自覚のあるなしにかかわらず、二つの立場が認められる。一つは、その対象とする言語を時間的な流れにそってとらえる立場である。一つは、言語を現在の視点でとらえる立場である。前者は、古代から現代に至る時間の流れとともにある言語を、その流れに応じて、あるいはその流れの一時期を区切って、そのままにとらえ記述する方法であって、古語辞典や時代別辞典はその典型である。後者は、常に時間とともに歩んでその先端に存在し、常に現在を中心に言語をとらえる。その記述する対象は、必ずしも現代語であるとは限らない。この立場では、過去も、現在を起点に、その現在の必要とする過去の言語文化を収める。本書はまさに、この後者の立場にある。

明治四十年に、本書が、言語学の泰斗金澤庄三郎博士の手により成って以来、脈々として生き続け、今まさに七十七の寿を迎えようとしている。この間、とりわけ昭和前半期においては一世を風靡し、識者により広辞林時代とよばれたその呼称にふさわしい充実をみ、その充実は、時代の情報の増大に応じて今日さらに豊かにふくらみをみせている。わが国で、後続の辞書編修の底本となったばかりでなく、日本を代表する辞書として海外の日本語研究の基盤となっている。初版より数えて六度目の版を改めて、今第六版を世に送ろうとしているが、本書の基本的な立場は、一貫して常に現在とともにあることに変わりがない。現在は時間とともに進行する。明治四十年初版の時点で真に現代に生きた本書は、昭和三十三年の四版においてまた現代に生き、今日また現代に生きている。これが本書の伝統の真骨頂である。明治四十年の現在は、すでに大正十四年第二版の現在ではなく、大正十四年は昭和九年第三版の現在でもない。昭和九年は昭和三十三年ではなく、まして今日の第六版の現在ではない。現代に用いられる日常語である和語（本来の日本語）・漢語（もと外来語であった）、主に片仮名で表わされる外来語はもちろん、百科万般の事項に関する語句、専門用語、固有名詞を中心に、現代人の必要とする過去の言語（古語から仏教語等々）に至るまで、常に改訂時における現代の必要を充してきた。今日、必要としない歴史的過去の言語とそれの伝える情報を削っても、補充せねばならぬ内容は無限に近く多い。きびしい選択を行なってなお、現代人に必要にして十分の十六万余語とそれに含まれる情報量は、初版時の約三倍にのぼる。

現代はまさに情報社会である。その現代にふさわしい言葉の意味用法の広がり、外来語の増大、社会用語・文化用語・科学用語の知識は多岐尨大に亘る。本書は可能の限り精選して現代を収め、また、心のふるさとであり、現代のよって立つ基盤である過去の言語と情報を現在の立場でとらえている。たとえば、中辞典で唯一、漢字表記を常用漢字による現代表記の視点で示し、歴史的表記とともに世上に提供するのも、その現われの一つである。

本書が、現代人の知識の宝庫として、実際の言語生活のよりどころとして、活きて用いられることを希望する次第である。われわれは、第六版刊行と同時に、次に来たる現在へ向けて、その歩みを続ける所存である。

昭和五十八年七月

三省堂編修所

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

この辞書のきまり

一　見出し語について

㊀　収録した範囲

現代語を中心にして、その他主要な古語を収めた。また、いわゆる百科語や建造物・作品名のたぐいの固有名詞も広く収録したほか、外来語については特に重視した。

㊁　表記法

① 現代語も古語も、ゴシック活字を使って現代かなづかいで示した。

② 和語・漢語はひらがなで示した。また、外来語および外国の固有名詞はかたかなで示し、長音には「ー」を用いた。ただし、「たばこ」「きせる」などのように、外来語の意識の薄くなっているものはひらがなで示した。

③ 複合語は、語構成に従って適宜「・」でくぎった。現代では単純語と思われているが、語源的には複合語であると認められるものも同様にくぎった。ただし、人名・地名には、これが複合語の一部である場合を除いて、省略した。

やま・みち[山道・山《路]　**しん・ぜん・び**[真善美]
さか・ずき[杯・〈盃・〈巵・〈盞]
こうし[孔子]　**とうきょう**[東京]
とくしま・ほんせん[徳島本線]

④ 活用語は、原則として終止形をあげ、語幹と活用語尾との間に「・」を入れた。

か・く[書く]　**たか・い**[高い]　**み・い・る**[見入る]

ただし、

(イ) 語構成のくぎりと活用語尾のくぎりとが一致する場合は、「・」だけでそのくぎりを示した。

あい・する[愛する]　**あおぎ・みる**[仰ぎ見る]

(ロ) 「そうろう(候・候ふ)」などのように、音が変化して語幹と活用語尾との区別がつかない場合は、歴史的かなづかいのほうに「・」を入れて示した。

そうろう[候・《候ふ]

(ハ) 形容動詞および漢字二字以上から成るサ行変格活用の漢語動詞は、それぞれその語幹を示した。

しずか[静か](ニ形動)　**うん・どう**[運動]スル

⑤ 和語のうち、現代かなづかいと歴史的かなづかいとでその表記法が著しく異なるものは、特に歴史的かなづかいによる見出し語を示して検索の便をはかった。この場合、見出し語の上に†印がつけてある。

†あふぎ[扇]　→おうぎ

⑥ 「いはふ(祝ふ)」「つかふ(使ふ)」などは、「いおう」「つこう」とも発音されるが、「いわう」「つかう」で示した。

㊂　配列

① 見出し語のかなの五十音順に従って配列した。

② 濁音・半濁音は清音のあとに、拗音・促音は直音の前に配列した。

じゅう[従]　**じ・ゆう**[自由]

③ 外来語の長音は、そのすぐ上の母音を重ねて表わした位置に配列した。（「**ネーブル**」は「**ネエブル**」の位置に）

④ 同じかなの見出しが幾つかあるときは、次の原則によった。

(イ) 品詞の順

造語成分（＋）・接頭語・接尾語・感動詞・助詞・助動詞・接続詞・副詞・連体詞・形容詞・動詞（五段・四段・上一段・下一段・上二段・下二段・変格活用の順）・形容動詞・代名詞・名詞の順とし、連語を最後に置いた。

(ロ) 同じ品詞の中では、

i　和語・漢語・外来語の順

ii　見出し漢字の、最初（または二番目）の漢字の画数の順

iii　外来語では、原語つづりのアルファベットの順

iv　普通名詞・固有名詞の順

⑤ 複合語のうち、最初の三音節以上にあたる部分が既に見出し語として示してある場合には、その同音の部分を「**ー**」で表わし、その見出し語に続けて示すことを原則とした。この場合、最初の見出しを「親見出し」、それに続ける見出しを「子見出し」という。

あたま[頭]　　**ーうち**[ー打ち]　　**ーかず**[ー数]

ただし、

(イ) 漢語の場合には、二音節でもそれが拗音を含む漢字二字から成る複合語（熟字）ならば、それを親見出しとした。

む-しゃ[武者]　　**ーえ**[ー絵]　　**ーまど**[ー窓]

(ロ) 人名の場合には、二音節以下でも親見出しとした。

ノア　『**ーの方舟**(はこぶね)』

⑥ 同じ親見出しに、複合語と、慣用句・ことわざなどの連語とが子見出しとしてあるときは、連語を複合語の前に配列した。この場合、連語を『　』で囲み、かな見出しは示さなかった。

のれん[暖簾(ゑん)]　『**ーに腕押し**』　『**ーを分・ける**』

ーし[ー師]　　**ーな**[ー名]

二　歴史的かなづかいについて

見出し語の下に、見出し語のかなづかい（現代かなづかい）と異なる歴史的かなづかいを小字で示した。

あおい(あふ)[葵]　　**か-し**(くわ)[菓子]

ただし、

(イ) 子見出しの際は、親見出しの部分の歴史的かなづかいを省略した。

おどり(をど)[踊り・躍り]　　**ーあが・る**[ー上がる](自五)

(ロ) 字音かなづかいのうち、水・追・唯・類などのたぐいは「すい」「ついい」「ゆい」「るい」とすべきとの説もあるが、従来に従って「すゐ」「つゐ」「ゆゐ」「るゐ」とした。

三　見出し漢字について

見出し語の、漢字を使って書くときの表記法を［　］で囲んで示した。なお、「PTA」「UNESCO」など、ローマ字で書くことが一般に行なわれているものもここに示した。

① 漢字の字体については、常用漢字字体のほか人名用漢字字体を使った。（付録「人名用漢字別表」参照）

②　漢字にはそれぞれ次のような印をつけて、常用漢字およびその音訓との関係を示した。

(イ)　無印の漢字は、常用漢字表にあり、そこで認められている音・訓によるものである。

さか-みち[坂道]　**あん-か**[行火]

(ロ)　〈印の漢字は、常用漢字表にないものである。

かさ[〈笠]　**あん-こく**[暗黒・〈闇黒]

(ハ)　《印の漢字は、常用漢字表にあるが、その音・訓が認められていないものである。

おさ[《長]　**はた**[端・《側・《傍]

ちか-う[《誓う・《盟う]

(ニ)　〈印の漢字は、その音・訓は常用漢字表に認められているが、普通には、かな書きにすることが多いものである。

なお、本文の脚注では、その旨を「かながきでもよい」と記してある。

じき-に[〈直に]　**ところ-が**[〈所が・《処が]

なぞ-かけ[謎〈掛け]

ただし、これは主として現代語を書く場合の規準であるので、用言の口語形には示したが、文語形にはつけなかった。

つめ-か-ける[詰め〈掛ける]　**つめ-か-く**[詰め掛く]

(ホ)　漢字二字以上に連続して同じ印がつくときは、次のように示した。

たこ-つぼ[〈蛸壺〉]

さか-つ-こ[《造酒児》]

いっ-さい[〈一切〉]

(ヘ)　：印は、いわゆるあて字または熟字訓であることを示す。

なお、これらを含む複合語は、「＝」であて字・熟字訓との部分をくぎった。また、作品名・人名・地名などの固有名詞に、常用漢字表にない漢字や音訓を用いた漢字が含まれている場合にも、便宜：印をつけて、いちいちの漢字に（・《などの印をつける煩わしさを避けた。

しくじり[：失敗]

へた-くそ[：下手＝〈糞]

なた-まめ[〈鉈豆・《刀豆]　**ーぎせる**[ー：煙管]

めいぼく-せんだいはぎ[：伽羅先代萩]

しゃか[：釈迦]

はこだて[：函館]

③　子見出しの漢字見出しで、親見出しと共通する部分の漢字は、「ー」で示した。

てい-き[定期]　**ーよきん**[ー預金]

④　一語に幾つかの意味をたてた場合、主としてそのうちの特定の意味にだけ使われる漢字表記は、その意味の初めに示した。

う-ける[受ける]　㊀…　㊃[《承ける]…

㊆[請ける]…

⑤　「送りがな」については次のように扱った。

(イ)　内閣告示の「送りがなのつけ方」に例示されている語はそれに従い、その他はそれを参考にした。（　）内のかなは、送らなくてもよいかなを示す。

おこない[行(な)い]　**おこな-う**[行なう]

(ロ)　見出し語が古語または文語の場合は、歴史的かなづかいで

送りがなを示した。

うけ・う[《祈ふ・《誓ふ]　**お・う**[生ふ]

(ハ) 活用語を含む複合語の場合、常用漢字表にない漢字の部分の送りがなは省いたが、活用する語にはその活用語尾を送った。

かき・なで[(掻撫)]　**かき・まわ・す**[(掻回す]

ゆき・たがい[行き《違]　**ゆき・たが・う**

[行き《違ふ]

四 品詞・活用などについて

見出し語の品詞・活用など文法的な機能からみた性質は、( )で囲み略語で示した。(次々ページ「略語・記号表」参照)

① 名詞は、その指示を省略した。ただし、特に必要があるときは示した。

② 漢語名詞で、「する」をつけてサ行変格活用の動詞として使われるものは、見出し漢字の下に「スル」と示した。

べん・きょう[勉強]スル

③ 形容詞は、いわゆるク活用・シク活用の形容詞にはそれぞれ(形ク)(形シク)と示したが、口語形容詞は(形)とだけ示した。

④ 形容動詞の語幹には、ナリ活用には(ニ形動)、タリ活用には(ト形動)と示した。

しずか[静か](ニ形動)

どう・どう[堂堂](ト形動)

⑤ 助詞は、格助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞・接続助詞の六種に分けた。

五 語釈・解説について

① 見出し語の意味または事柄については、なるべくわかりやすいことばで的確・簡潔に記述するように努めた。

② 一語に、現代使われている意味のほかに古語特有の意味があるときは、〔古〕として記述し、多くは現代語の意味のあとに置いた。〔古〕の指示のない意味には、現代語と古語とに共通するものもあるから注意されたい。

すこぶる[頗る](副) ㈠はなはだ。非常に。「―迷惑だ」

㈡〔古〕少しばかり。「これはただ―覚え侍るなり」〔大鏡・時平〕

③ 用言で、いわゆる口語形と文語形とが対応するものは、口語形の見出しに語釈・解説をつけた。この場合、見出し語の下にその文語形を示した。ただし、五段活用に対して四段活用を示すことは省いた。

なが・める[眺める](他下一)〔文語 なが・む(下二)〕

④ 意味の理解を助けるために、語釈・解説の始めに

(イ) 《 》( )で囲んで、語源的・語誌的説明や発音の変化、用法などを示した。また、外来語や外国の固有名詞の原づりやその意味なども示した。この場合、ドイツ語・フランス語・ポルトガル語などは、ドイ・フラ・ポルト のようにしたが、英米からの外来語にはその原籍を省いた。いわゆる和製英語のたぐいは、和 で示した。原つづりの中で、イタリックで示した部分は国語の発音に表われない部分を示す。

(ロ) 〔 〕で囲んで、宗・法・哲・枕・古など、その語の使われる範囲(位相)を示した。〔古〕は、いわゆる古語をさし、

主として奈良時代から江戸時代までの文献に見える語で、現代共通語では使われなくなったと思われるものに示した。

⑤ 表記・体裁などについては、

(イ) 原則として、現代かなづかい・常用漢字・送り仮名の付け方によった。それ以外の漢字を使うとき、または誤読・難読のおそれのあるときは、その読みをつけるようにした。

(ロ) 語釈・解説の分類は、一般には㈠㈡… を用い、更に細分するときは、①②… ㋑㋺… などとした。品詞・活用の種類、自動詞・他動詞を区別する場合、助詞の下位分類を示す場合、助詞・助動詞を現代語・古語に分けて解説する場合などには、[一][二]… を用いた。

(ハ) 解説文の簡明化と紙面の節約を図るため、次のような形式を用いたところも多い。

顔が熱く(赤く)なること。 {顔が熱くなること。 顔が赤くなること。} の意

世の中(の人)。 {世の中。 世の中の人。} の意

⑥ 用例は「　」で囲み、語釈の最後に示した。

(イ) 古語の用例は、できるだけ学習の参考になるものを選んだ。

(ロ) 古語の用例文は、読みやすくするために、原典の漢字をかなに、かなを漢字に改めたところがある。また、かなづかいは歴史的かなづかいに統一した。

(ハ) 用例文中、見出し語に相当する部分は、「―」で示した。ただし、動詞・形容詞の場合はその語幹だけを「―」で表わし、一段動詞・助動詞は全語形をかたかなで示した。

(ニ) 用例の意味を理解する助けとして、(　)で囲み漢字かたかなまじり文で注記した。解釈の場合は(＝)に入れて示した。

(ホ) 漢字の読みは、古語の用例でも現代かなづかいで示した。

⑦ 用例の出典名は、多くは略称を用いて〔　〕で囲んで示した。そのおもなものは次のとおりである。なお、底本には多く「日本古典文学大系」「日本古典全書」などを用いた。

〔記・上〕	古事記・上巻
〔推古紀〕	日本書紀・推古天皇
〔万・二六六〕	万葉集・国歌大観番号二六六番
〔古今・春上〕	古今和歌集・春の歌上
〔枕・一二〕	枕草子・一二段(古典大系)
〔源・桐壺〕	源氏物語・桐壺の巻
〔平家・一〕	平家物語・巻第一
〔宇治拾遺・二五〕	宇治拾遺物語・説話番号二五
〔徒然・三〕	徒然草・第三段　〔古典大系〕
〔謡・安宅〕	謡曲「安宅」
〔狂・粟田口〕	狂言「粟田口」
〔伽・一寸法師〕	御伽草子「一寸法師」
〔浄・新版歌祭文〕	浄瑠璃「新版歌祭文」
〔浮・傾城禁短気〕	浮世草子「傾城禁短気」
〔滑・浮世風呂〕	滑稽本「浮世風呂」

西鶴・芭蕉・近松(門左衛門)の作品については、〔西鶴・世間胸算用〕〔芭蕉・奥の細道〕〔近松・生玉心中〕のように示した。

⑧ 解説の補助として、さし絵を約千五百入れた。

略語・記号表

（接頭）……接頭語
（接尾）……接尾語
（感）……感動詞
（格助）……格助詞
（副助）……副助詞
（係助）……係助詞
（終助）……終助詞
（間助）……間投助詞
（接助）……接続助詞
（助動）……助動詞
（接）……接続詞
（副）……副詞
（連体）……連体詞
（形）……形容詞
（自）……自動詞
（他）……他動詞
（形動）……形容動詞

（代）……代名詞
（名）……名詞
（連語）……連語
（五）……五段活用
（四）……四段活用
（上一）……上一段活用
（下一）……下一段活用
（上二）……上二段活用
（下二）……下二段活用
（カ変）……カ行変格活用
（サ変）……サ行変格活用
（ナ変）……ナ行変格活用
（ラ変）……ラ行変格活用
（ク）……ク活用
（シク）……シク活用
（ニ）……ナリ活用
（ト）……タリ活用

〔古〕……古語
〔枕〕……まくらことば
〔経〕……経済・商業
〔植〕……植物学
〔心〕……心理学
〔数〕……数学
〔生〕……生物学
〔地〕……地学
〔哲〕……哲学
〔天〕……天文学
〔動〕……動物学
〔法〕……法律学
〔理〕……理化学
〔論〕……論理学
〔言語〕……言語学
〔文法〕……文法
〔楽〕……音楽

〔仏〕……仏教
‡……造語成分
+……歴史的かなづかいによる見出し
（……常用漢字以外の漢字
≪……常用漢字表に認められていない音訓
〈……常用漢字表で認められているがかながきが普通の語
：……あて字・熟字訓など
↕………の対
↓……を見よ
⇩……を参照せよ
＜……外来語で、原籍を示す

外来語は、原つづりの上に（ドイツ）（フランス）（ポルトガル）などのように示した。
また、いわゆる和製英語のたぐいは、和で示した。
何も指示してないものは英米語である。
原つづりの中でイタリックで示した部分は、国語の発音に表われない部分を示す。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

あ

日本語の音の一つ。また、かな字母の一つ。①五母音の一つ。広母音であり、前舌の[a]と後舌の[ɑ]との中間的な母音。便宜的に[a]で表わす。②五十音図で、第一行の一番目の音。真文字。いろはで三十六番目。③ひらがなは「あ」で、安の草体。かたかなは「ア」で、「阿」の偏から変化したもの。ローマ字では a と書く。

あ〔亜〕 [一]〔接頭〕㊀…に次ぐの意。「―寒帯」㊁化合物の名の上につけて、その酸素原子の割合が少ないことを表わす。「―・硫酸(硝酸)」 [二]〈名〉亜細亜(アジア)の略。「欧―の天地」

あ〔感〕 ㊀感動や軽い驚きを表わす声。「―まった」 ㊁呼びかける声。「―君ちょっと」 ㊂応答の声。「―そう」

あ〔吾・我〕〔代〕〔古〕自称の人代名詞。わたし。われ。「―はもよ女(をみな)にしあれば汝(なれ)を除(おき)て男(をとこ)は無し」〔記・上〕

あ〔彼〕〔代〕〔古〕遠称の指示代名詞。あれ。かれ。「―はと見る、あはぢの島の」〔源・明石〕

あ〔足〕〔古〕あし。「―ぶみ(鑑)」

あ〔畔・畦〕〔古〕あぜ。くろ。「営田(ためつくり)の―をはなち」〔記・上〕

あ〔阿〕 ㊀阿弗利加(アフリカ)の略。「南―共和国」 ㊁梵語の第一字母。→阿字

あ〔唖〕おし。聾―者(ろうしゃ)

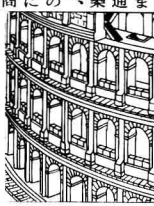
ああ〔感〕㊀[:嗚呼・:嗟・:噫]感嘆の気持を表わす声。「―悲しいかな」 ㊁呼びかける声。「―しばらく」 ㊂応答の声。「―承知した」

ああ〔副〕あのように。「―いうこと」「―したこと」

アーガイル・チェック《argyle(＜Argyll(スコットランドの部族の名))check》そろばん柄。はでなダイヤ柄。セーター・靴下(くつした)などによく使われる。ダイヤモンドチェックとも。

アーク・とう[アーク灯(燈)]《arc lamp》向かいあった二本の炭素棒に電流を通じて、白熱光を出させる電灯。弧灯。

アーケード《arcade(＜ラテ arcata(弓形))》㊀建築で、アーチを連続的に使った建造物。また、その下の通路。西洋建築の寺院や宮殿、または野球場の外まわりなどに見られる。㊁商店街などで、屋根風のおおいをつけた通路。


[アーケード㊀]

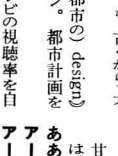
アーゴノミックス《ergonomics(＜erg(エルグ・仕事量)＋economics(経済))》〔経〕工業デザインの一方式。生理学・心理学・生産工学など、関連諸分野を総合的に研究し、デザインの機能向上と仕事の能率化をはかろうとするもの。ヒューマンエンジニアリングとも。

アーサーおう・ものがたり[ラウ]〔アーサー王物語〕《the Arthurian legends》六世紀のブリタニア王アーサー、および彼をめぐる円卓の騎士の冒険・恋愛などを主題とした伝説物語。中世以降、ヨーロッパ諸国で歌物語として吟唱され、やがてサー＝トマス＝マロリーの「アーサー王一代記」(一四八五年)となって集大成された。

ああしゃ・ごしゃ〔感〕〔古〕あざけり笑うことば。「―、こはあざわらぶぞ」〔記・中〕

アース《ス earth(地球・大地)》電気で、接地。地絡。ラジオ・洗濯機などと地面との間に電路を作る装置。

アーチ《arch(＜ラテ arcus(弓))》㊀弧形。弓形。「虹(にじ)が空に―を描く」 ㊁建築で、上部を弓形に張るように築いた建造物。橋げた や門などによく見られる。迫持(せもち)。 ㊂スギ・ヒノキなどの常緑樹の葉でおおってかざった門。歓迎や祝賀の式場の野外にたてる。緑門(ろくもん)。


[アーチ㊀]

アーチェリー《archery》㊀洋弓。西洋ふうの弓。日本の弓より小さい。 ㊁スポーツで、弓技の一つ。洋弓で標的を射て得点を争う競技。

アーチザン《フラ artisan》㊀職人。熟練工。また、工芸家。→アーチスト ㊁技術は巧みであっても、芸術性に欠ける作品を作る人。技巧派。職人的芸術家。

アーチスト《artist》美術家。また、芸術家。

アーティフィシャル《ニ形動《artificial》》㊀人工的。人為的。技巧的。 ㊁わざとらしいさま。不自然なさま。

アート《art＜ラテ ars(術)》㊀芸術。とくに、美術。 ㊁技術。 ㊂人工。 **―し**[―紙]《art paper》表面に胡粉(ごふん)など、特殊な塗料をぬってみがき上げた、なめらかで光沢のある印刷用紙。多色刷に用いる。 **―シアター**《art theater》普通の映画館では上映〜しない(しなくなった)芸術映画・実験映画などを専門に上映する映画館。 **―タイトル**《art title》映画・テレビなどの、技巧をこらした題字。意匠字幕。 **―ディレクター**《art director》㊀映画・演劇などで、美術監督。装置・衣裳などをデザインする。 ㊁広告で、宣伝美術部門の担当責任者。

アートマン《本来は梵語。「我(が)」の意》古代インド哲学の中心概念。人間の本質を形成する永遠の実在であり、これを知ることによって、宇宙の本源であるブラフマン(梵)に帰入しうるという。

アーニー・ローリー《Annie Laurie》スコットランドの民謡の一つ。マスコット作詞。アーニー＝ローリーへの恋をうたった歌。わが国でも、古くから「才女」の題で親しまれた。

アーバン・デザイン《urban(都市の)design》都市計画の一部。都市デザイン。都市計画を具体的に図面化すること。

アービトロン《Arbi tron》テレビの視聴率を自動的に記録する装置。調査家庭と会社とを電話線で結び、九〇秒ごとに視聴番組を記録、一五分ごとに全調査記録を集計する。米国のARB(アメリカン・リサーチビューロー)が開発。→オーディオメーター・ビデオメーター

アーベント《ディ Abend(夕べ)》夕方から夜にかけて開かれる音楽会などの催し。

アーマチュア《armature》→電機子

アーミー《army＜ラテ arma(武器)》軍隊。とくに、陸軍。→ネービー

アーミン《ermine》㊀貂(てん)。 ㊁純白な貂の毛皮。シベリア産の貂からとるのを最高とする。

アーム《arm》腕。また、腕型のもの。建築では腕木、服飾では袖(そで)の意。 **―スリット**《arm slit》ケープなどについている、腕を出すための穴。 **―チェア**《armchair》ひじかけ椅子(いす)。 **―ホール**《armhole》洋服の袖(そで)ぐりの線。 **―レスト**《armrest》㊀レコードプレーヤーで、レコード演奏しないとき、トーンアームを置いておくささえ。 ㊁自動車で、座席のひじかけ。腕もたれ。 **―レット**《armlet》㊀小さく短い袖(そで)。 ㊁上腕に巻く腕輪。→ブレスレット **―ロック**《armlock》レスリングで、相手の腕をきめて動作を封じるわざ。

ああ・むじょう[:噫無情]「レミゼラブル」の、黒岩涙香による日本語訳書名。

アーメン《amen＜ラテ(誠)》キリスト教で、祈りの終りに唱えることば。「真にそうあれかし」の意。

アーモンド《almond＜古フランス alemande》㊀バラ科の落葉小高木。巴旦杏(はたんきょう)。ペルシアの原産で、昔から薬用・食用として欧州で栽培されている。実は平たい球形で、熟すとかわいて縦にさける。扁桃(へんとう)。巴旦杏(はたんきょう)。アメンドウ。 ㊁㊀の果実の種子すなわち仁(じん)。甘味のあるものと苦味のあるものがあり、前者は食用として洋菓子などに用い、後者はせきどめの効用があり薬用にする。 **―ゆ**[―油]アーモンドの実を絞ってとった油。甘いものからとった油は化粧品用、苦いものからは、せきどめなどの薬用にする。

ああら〔感〕あら。あれ。まあ。「―、不思議」

アーリア・じん[アーリア人]→アーリアン

アーリアン《Aryan＜サンスクリ 貴族》元来は古代インド・ペルシアにいた一部族。後にインドヨー

ロッパ系人種という意味で、「アーリアン人種」ということばが拡大して使われた。ナチスドイツ時代には、アーリアン人種の純血が強調され、反ユダヤの人種政策に利用された。**―ごぞく**「―語族」アーリアン人種によって話される、同系関係にある言語の総称。

アーリー・バード《Early Bird（早起きの鳥）》米国の、初の商業通信衛星の愛称。一九六五年打ち上げ。インテルサット一号とも。

アール《フランスare 記号 a》メートル法の面積の単位。一アールは、一〇〇平方メートルで、一〇〇分の一ヘクタール。約三〇坪二合。約一畝。

アール・デコ《フランスarts décoの略》一九一〇年代から一九三〇年代にかけて、パリを中心に流行した装飾芸術の様式。当時のキュービズム運動の影響を受け、冷たく厳正で、ロマンチシズムを否定する。一九六九年ごろから服飾界でふたたびはやりだし、室内装飾などにもとり入れられている。

アール・ヌーボー《フランスart nouveau（新しい）》二〇世紀の初め、フランスを中心に流行した建築・工芸・美術の一様式。植物的な流れるような曲線を特色とする。

アーンド・ラン《earned run》野球で、自責点。敵のエラーによらず、投手の責任(安打・犠打・盗塁・四球・死球・暴投など)によってランナーが生還して得た点。

あいじょう［相］［四］接頭 ㊀動詞や名詞について、「いっしょに」「ともに」「互いに」などの意味を添える。「―信じて(等しい)」「―弟子(ぢ)」㊁動詞について語調を整えるのに使う。手紙文(特に文語文)に多い。「―成るべく」［四］名［古］㊀相づちを打つこと。㊁酒の相手をすること。㊂共謀すること。また、その仲間。㊃あいこ。

あい（感）返事の声。はい。

あい東風。ただし、土地により風の方向や言い方に違いがある。あいのかぜ。あゆ。

あい［会い・(逢い)］あうこと。対面。「お―になる」「夢(ゆめ)の―は苦しかりけり」［万・詞一］

あいいき［間］㊀あいだ。すきま。㊁→あいのきょうげん。㊂→あいごま ㊃→あいのしゅく

あいあみ［藍］㊀タデ科の一年草。高さ約五〇センチ。葉は長円形で互生し、夏、赤い小さな花が穂のように咲く。花が開く前に葉を刈り取り、発酵させて、藍色の染料の原料にする。㊁アイの葉から作った、一種の藍色染料。たであい。㊂藍色。

あい［哀］㊀哀むこと。哀れみ。㊁悲しむこと。悲しみ。㊂喪(も)。

あい［愛］㊀かわいがり大事にすること(心)。「―犬用」㊁異性を恋い慕う気持。恋。「―人」㊂好むこと。「―唱(読)」㊃キリスト教で、神が人間をいつくしみ幸福を与えること。㊄(仏)①十二因縁の一つ。五欲をむさぼること。食愛(じき)・愛着で世間の事象をむさぼること。②仏の絶対平等な大慈悲。③仏法を信じ仏法を好むこと。

あい・あい［哀哀］(ト形動)悲しいさま。いとおしさま。哀れなさま。

あい・あい［(藹藹)］(ト形動)㊀草木の茂るさま。㊁心の和らいださま。「和気―」

アイアイ《aye-aye》マダガスカル島特産。リスザルとも。鳴き声からの名。

あいあい・がさ(ひとつ)［相合傘・相相傘］一本のかさを男女ふたりでさすこと。あいがさ。

アイアン《iron（鉄）》ゴルフ用の、全体または頭部が鉄製のクラブ(打棒)。↔ウッド

あい・いく［愛育］スル かわいがって育てること。

アイーダ《Aida》ベルディ作曲の歌劇。四幕。一八七一年、カイロで初演。古代エジプトの将軍ラダメスと、エチオピア王女アイーダの恋愛悲劇。グランドオペラの代表作。

あい・いる(あ)［相居る］(自上一)［古］いっしょにいる。「狭(さ)き所にあまた―るで」［徒然・三〇］

あい・いれない(あ)［(相)容れない］［連語］主張・性質などが互いに異なって一致しない。

あい・いろ(あ)［(藍色)］藍で染めた色。青よりは濃く紺よりは薄い。

あい・いん(あ)［合い印］㊀書類・帳簿などの引合せが済んだしるしに押す印。合い判。㊁割り符などに押す契印。

あい・いん［愛飲］スル 好んで飲むこと。

あい・うち(あ)［相打ち］相撃ち。相討ち。㊀ふたりが同時に一つの物をうつこと。㊁剣道などで、ふたりが同時にうちあうこと。㊂ふたり以上の者が協力して、ひとりの敵をうつこと。

あい・う・つ(あ)［相・搏つ・相打つ］(自五)《多く連体形で》(人間同志が)闘ったり、わたり合ったりすることを、改まってやや壮重に表現する語。「肉弾―・つすさまじい試合」

あい・えん［愛縁］［仏］恩にひかされて愛着する因縁。断ちがたい恩愛の縁。

あいえん・か［愛煙家］非常にたばこが好きな人。

あいえん・きえん(あ)［合い縁奇縁］人と人との気持がうまく合うのも合わないのも、みな不思議な縁によるものであるということ。

あい・おい(おう)［相生］㊀いっしょに生まれ育つこと。㊁同じ根もとから幹が二本分かれ出ること。「―の松」**―むすび**［―結び］ひもの結び方の一つ。普通の女結びに、一方の端を更にその結び目に通す方法。

あい・おい(あ)［相老い］夫婦がそろって長生きすること。

あいおもい・ぐさ(あ)［相思ひ草］［古］→たばこ

あいおれぐさ(あ)［合い折れ草］(直角に曲がっていて、両方の端がとがっているぐさ。

あい・か［哀歌］悲しい気持をよんだ歌。悲歌。エレジー。

あい・がえし(あ)［(藍返し)］模様のある上を、藍で染め返したもの。

あい・がかり(あ)［相懸かり］㊀敵味方の両方から攻めかかること。㊁将棋の序盤で、両方とも同じこま組みを作って攻めの準備をすること。

あい・かき(あ)［合い欠き］木材などをつなぎ合わせるとき、その端を半分ずつ欠いて、そこを合わせてつなぐ方法。

あい・がぎ(あ)［合い(鍵)］一つの錠前に合うかぎのほかに、それに合う別のかぎ。

あい・かご(あ)［相(駕籠)］ふたりで一つのかごに乗ること。

あい・がさ(あ)［相傘］あいあいがさ。

あい・かた(あ)［合い方］㊀うたい手に対し、三味線(しゃみせん)をひく者。㊁芝居で、役者のせりふに合わせて入れる三味線の囃子(はやし)。㊂能で、謡に伴奏する、大鼓・小鼓・太鼓・笛などの囃子方。

あい・かた(あ)［相方］㊀相手。㊁芝居で、主役の相手になる役者。㊂遊里で、その客の相手になる遊女。

あい・かた(あ)［相肩］ふたりで一つの物をかつぐとき、その一方の者。相棒。

アイカップ《eyecup》㊀洗眼コップ。硼酸(ほうさん)水などを入れ、目にあてて洗眼する。㊁顕微鏡・計測器などで、漏光防止や目の保護のために、接眼レンズ部につけるコップ状の付属品。

あい・かまえ・て(まえ)［相構えて］(副)［古］よく注意して。必ず。「―忘れず」

あい・がみ(あ)［間紙］㊀器をいためないように、器と器の間にはさむ紙。㊁印刷物の間に入れて、インキのよごれを防ぐための紙。

あい・がみ(あ)［(藍紙)］ツユクサの花の汁で藍色に染めた紙。こんがみ。あおがみ。

あい・がめ(あ)［(藍)瓶］藍汁をたくわえておくかめ。あいつぼ。

アイ・カメラ《eye-camera》眼球の運動を記録する装置。眼球に光をあてて、その反射光をフィルムに記録し、視線の動きを分析する。

あい・がも(あ)［(間)鴨］㊀ガンカモ科の鳥。マガモとアヒルをかけあわせてできたもの。㊁アヒルの肉。

あい・がわ(がわ)［(藍革)］藍色に染めたなめしがわ。武具に用いられる。あいなめし。

あい・かわらず(あ)［相変わらず］(副)今までと変わらないで。前と同じように。「―元気です」

あい・かん［哀感］もの悲しくさびしい感じ。「―をさそうメロディー」

あい・かん(わん)［哀歓］悲しみと喜び。「人生の―を味わう」

あい・がん(わん)［哀願］スル 相手の同情心に訴えて頼むこと。哀訴。

あい・がん(わん)［愛(玩)］スル 慰みとして身近に置いてかわいがること。「―動物」

あい・き［愛機］愛用している自身の飛行機・写真機その他の器機。㊁［愛器］愛用している(自身の)楽器。

あい・き［曖気］おくび。げっぷ。

あい・ぎ(あ)［合い・(襟)］着・間着］㊀上着と下着の間に着る衣服。㊁あいふく(合服)。㊂あこめ(衽)。

あい・ぎ［愛戯］(男女の)性的なたわむれ。

あい・ぎこえ[相聞(こ)え]〔古〕→そうもん(相聞)

あいき・どう[合気道] 武術の一種。柔術から出たもので、護身術として用いられる。関節わざ・当て身などを特色とする。合気術。

あい・きゃく[相客] ㊀同席する客。㊁宿屋で、同じやど泊り合わせた客。

アイ・キャッチャー《eye-catcher《人目をひくもの》》一目で特定の会社やその製品を連想させる広告宣伝用の絵や図柄。beauty(美人)・beast(動物)・baby(赤ちゃん)の三Bが効果があるといわれる。ひキャッチフレーズ

あい・きょう[愛郷] ㊀故郷を愛すること。「―心」㊁故郷をなつかしく思うこと。「―の念」

あい・きょう[愛(嬌)] ㊀愛(敬)㊁かわいらしいこと。人好きすること。「―のあることも」㊂あいそのよいこと。おせじのよいこと。「―を振りまく」㊃売り物に添えるもの。㊄興を添えるもの。「とんだご―だ」㊅人や動物がこっけいなこと。「サルは―がある」―**あばた**[―・痘痕]それがあるために かえって顔にあいきょうを添えるあばた。―**げ**[―毛]女の髪㊇のあたりなどにたれた髪の毛。顔にあいきょうを添えるのでいう。―**しょうばい**[―商売]料理屋などのような、あいきょうを第一として客に接する商売。客商売。―**づきあい**[―〈付き〈合い〉]とおりいっぺんのつきあい。―**び**[―目]→おんないび(恩恵目)―**べに**[―紅]演劇で、俳優が目じりや耳たぶにつける紅。―**ぼくろ**[―黒子]それがあるためにかえって顔にあいきょうを添えるほくろ。―**まもり**[―守り]江戸時代、婚礼のときに花嫁の首に掛ける守り袋。―**もち**[―餅]結婚後三日目に、しゅうと・しゅうとめに贈るもち。みかのもちい。―**わらい**[―笑い]→あいそわらい

あい・ぎょう[愛敬]〔古〕㊀性格・顔かたちが愛らしく魅力のあること。「―はにほひ散りて、またくめづらしき人の御様なり」〔源・野分〕㊁優しい心。思いやり。「―なく人をもてはなる心あるは」〔源・若菜上〕―**づく**[―付く]〔自四〕〔古〕愛敬があるようになる。

あい・きょうげん[―狂言]《間狂言》→あいのきょうげん

あい・ぎょう[愛(敬)]〔古〕㊀愛らしい魅力のあること。「―はにほひ散りて、またくめづらしき人の御様なり」〔源・野分〕㊁優しい心。思いやり。「―なく人をもてはなる心あるは」〔源・若菜上〕―**づく**[―付く]〔自四〕〔古〕愛敬があるようになる。

あい・きょうげん[―狂言]《間狂言》→あいのきょうげん

あい・ぎり[―切り]《間切り》タケの節と節との間を切って作った笛。ひとよぎり。

あい・ぎん[―銀]〔古〕㊀両方の貨幣の価値の差額。㊁手数料。口銭。あいせん。

あい・ぎん[愛吟]スル好んで吟ずること。〔詩歌〕。

あい・ぐぎ[合い・剣] 板と板とを継ぎ合わせるのに使う、両端のとがったくぎ。

あい・ぐ・す[相具す]〔他サ変〕連れて行く。同行する。「―[自サ変]㊀連れだって行く。いっしょに行く。㊁〔古〕夫婦になる。「この中納言は…宰相殿と申す女房に―して」〔平家・四〕

あい・ぐすり[合い・薬]その人の体質に特によく効く薬。

あい・くち[合い・口]㊀つばのない短刀。九寸五分(ごぶ)。七首(しゅ)。㊁話がよく合うこと。話のよく合う友人。―**に鑢**(やすり)(あいくちはつばがないところからふつうあいなこともののたとえ。

あい・くま[―隈]芝居の隈取(くまど)の一種。藍色で顔をくまどったもの。

あい・くる・し[愛くるしい]〔形〕〔文語 愛くる・しシク〕あいきょうがあってかわいらしい。たいそうかわいらしい。―**くるしげ**〔ニ形動〕―**くるしさ**〔名〕

あい・けい[愛敬]スル親しみ敬うこと。

あい・けん[愛犬]㊀かわいがっている犬。㊁犬をかわいがること。「―家」

あい・こ[―〈相子〉]互いに勝ち負けがないこと。

あい・こ[愛顧]スル客が商人・芸人などをひいきにし、引き立ててやること。「長年の―にこたえ…」

あい・ご[―アイゴ科の海魚。体長約三〇センチ。普通茶色で、はっきりしない点が散在している。背びれと腹びれにとげがある。あい。あえ。

あい・ご[―相碁]碁の腕まえが同じくらいの―と(人)。

あい・ご[愛護]スルかけがえのないものとして大切に保護すること。「国語の―」「動物―」

あい・こう[愛好]スル趣味として好むこと。「スポーツを―する」「―者」

あい・こう[愛校]自分の学校を愛すること。「―心」

あい・こう[―〈隘巷〉]町中の狭く苦しい道。狭くて見苦しい町。

あい・ごう[―哀号]スル㊀悲しんで泣き叫ぶこと。㊁朝鮮古来の葬式の一風習で、声をあげて泣き叫ぶこと。

あい・こく[哀・哭]スル声をあげて悲しみ泣くこと。

あい・こく[愛国]自分の国を愛すること。「―心」―**しゃ**[―社]明治初期の、民選議院設立を目的とする政治結社。一八七五年(明治八)板垣退助(いたがき)らの立志社が中心となって大阪で結成。八〇年国会期成同盟と改称。自由党創立の母体となった。―**ふじんかい**[―婦人会]一九〇一年(明治三十四)奥村五百子(いおこ)が創設した、戦死者の遺族や傷痍(しょうい)軍人の救護を目的とした婦人団体。第二次大戦後解散。

あい・ことば[合い・言葉]㊀前もって決めておいて、仲間であることを確かめるときに使うことば。「山」と言えば「川」と答える類。㊁仲間が行動の目標として掲げることば。スローガン。「私たちの―は『熟慮断行』です」

アイコノクラズム《iconoclasm》eikon(聖画像)+klasma(こわされたもの)》偶像破壊。因習打破。

アイコノスコープ《iconoscope》eikon(像)+skopein(見る物)》テレビ撮像管の一種。像を点の集合に分解、その明暗を電流に変える。

あいご・の・わか[愛護の若]江戸初期の説経節に見える主人公の名。継母に恋されたが、これを拒絶したために迫害を受け、ついに盗賊の汚名を着せられて、滝に身を投じた美少年。浄瑠璃(じょうるり)などにも取材された。

あい・ごま[―駒]将棋で、自分のこまを守るために、相手のこまとの間に置くこま。あししゃ。あいま。あい。

あいさ[―秋(ゆき・秋早)]ガンカモ科の水鳥。体はやや細長く、頭部の羽毛は後ろに長く伸びている。くちばしは細長く、縁にきざきがある。ウミアイサ・カワアイサなどの種類がある。冬、わが国に渡って来る。あいさがも。あきさがも。

あい・さい[愛妻]㊀愛している妻。㊁妻をたいせつにすること。「―家」

あい・さく[相作・相間作]㊀農作物のうねとうねとの間を使って、別の農作物を作ること。かんさく。㊁一つの農作物の収穫後、次の農作物を作り始めるまでの短い期間に、野菜などを作ること。

あい・さき[相座敷]一つの座敷に泊まり合わせること。相宿(あいやど)。

あい・さつ[〈挨拶〉]スル㊀親しみや敬意を表わして社交的なことばを述べること。また、そのことば。固定したことばを使うことが多い。「朝の―」「儀礼的なことばを述べること。また、そのことば。「新任の―」「開店の―状」㊁受け答え。応待。返礼。「―のしようがない」㊃〈―〉―の形で〕すげないことば。「それは―だね」㊄〔古〕仲裁。仲裁人。㊅〔古〕仲。関係。交際。「―切るよし」㊆禅宗で、門下の僧と押し問答をし、悟りや知識・見識の程度をためすこと。―**にん**[―人]㊀あいさつに出る人。㊁〔古〕仲裁人。

あい・ざめ[―鮫]㊀ツノザメ科の海魚。体長約五〇センチ。皮を利用するので知られている。㊁刀のさやにアイザメの皮をはり、漆を塗ってみがき、さやを薄青くしたもの。

あい・さん[愛餐]初期キリスト教会で、教徒が聖餐式後、持ち寄って行なった会食。友愛と慈善との趣旨に基づいたもの。

あい・し[―相仕]〔古〕いっしょに事をする者。手伝い。相手。

あい・し[哀史]悲しい歴史。哀れな物語。「吉野朝女工―」

あい・し[哀詩]哀れな事柄をうたった詩。

あい・じ[愛児]かわいがっている子ども。いとしご。

アイシェード《eyeshade》光線よけの目びさし。サンシェードとも。

あい・じつ[愛日]㊀《左伝注に「冬日は愛すべし」とある》冬の日。↔畏日(いじつ)㊁《大戴礼(だいたいらい)に「君子は愛日(あいじつ)以て学ぶ」とある》時間をたいせつにすること。㊂《揚子法言に「孝子は愛日(あいじつ)」とある》父母に孝行をすること。

あい・しゃ[―〈間遮〉]スル→あいごま(間駒)

あい・しゃ[愛車](乗用車・レーシングカーなどについて)愛用している自身の車。

〈 は常用漢字以外の漢字
〈 は常用漢字の音訓表にない音訓
〈〈 はかながきにしてもよい

あい・じゃく〔愛〈惜〉ル〕→あいせき

あい・じゃく〔愛着・愛〈著〉ル〕㊀〔仏〕何かに心がとらわれて、どうしても思い切れないこと。㊁→あいちゃく

あい・じゃくや〔相借家〕同じ家主から家を借りること。または、同じ長屋に住むこと。

あい・じゃくり〔合〈決〉〕板を張るとき、二枚の板の端を厚みの半分ずつ削り取って重ね合わせる継ぎ方。

アイ・シャドー《eye shadow（影）》目ぶたに陰影をつける化粧品。青・黒・茶など各種の色がある。

あい・しゅう〔哀愁〕寂しく、もの悲しい気持。

あい・しゅう〔執〕深く愛して思い切れないこと。愛情のために心が自由に働かないこと。

あい・しょ〔愛書〕㊀愛読している書物。㊁書物が好きなこと。「―家」

あい・しょう〔相性・合い性〕㊀性質が合うこと。性とは、陰陽家の五行説が男女の生年を木・火・土・金・水の五行に分けて割り当てたもので、木と火、水と土、土と金などは性が合うという。㊁(男女の)性格がよく合うこと。「―がいい」

あい・しょう〔哀傷〕ル 悲しみいたむ(嘆く)こと。

―か〔「歌」〕「古今集」以後の歌集の部立ての一つ。人の死をいたむ歌。

あい・しょう〔妾〕お気に入りのめかけ。

あい・しょう〔愛称〕㊀親しい間柄で、親しみの気持をこめて呼ぶ呼び名。㊁親しみを持たせるための呼び名。起特・急を「ひかり」と呼ぶなど。

あい・しょう〔愛・誦〕・〔愛・唱〕ル 詩歌などを愛し好んで朗読し、または歌うこと。「―歌」

あい・じょう〔愛情〕何かに対して愛を抱く気持。感情の変化や、ことに反映されるものとしてとらえられる。「母への―」「―を寄せる」「―に満ちたまなざし」

あい・じょう〔愛嬢〕かわいがっている娘。他人の娘にいう。

あい・しらい〔古〕㊀応答すること。もてなすこと。㊁とりあわせること。㊂能で、相手の演技に応対すること。

あい・しる〔藍汁〕アイの染料を溶かした汁。

あい・じるし〔合い印〕㊀ほかの物と紛れないように、その物に付ける目じるし。㊁敵味方の区別がはっきり分かるように、味方に付けるしるし。

あい・じん〔愛人〕㊀愛している人。恋愛の相手。恋人。また、情婦あるいは情夫。㊁人間をたいせつなものと考えること。「敬天―」

アイシング《icing》㊀自動車で、気化器に氷の被覆が生ずること。寒冷多湿のとき、気化器が氷に閉ざされて不調に陥ること。㊁アイスホッケーで、センターラインの手前から、パックが相手のゴールラインを越えること。パックを打った側の氷域（ゾーン）にもどって試合が再開される。

アイジングラス《isinglass》にかわの一種。に料理や宝石接着剤に用いられる。

あい・す〔愛す〕㊀(他五)→愛する ㊁(他サ変)「愛する」の文語。

アイス《ice（氷）》㊀冷やしたコーヒーやミルクなど。↔ホット ㊁(アイスクリームの)略語。「氷菓子」をもじって)俗語で、高利貸。㊂→アイスキャンディー・アイスクリーム **―ウォーター**《ice water》(氷入りの)おひや。氷片を入れた飲み水。**―ウォール**《ice wall》氷壁。氷雪におおわれた岩壁。**―キャンデー**《和＜ice＋candy》氷菓子の一種。果汁やシロップを棒状その他の形に凍らせたもの。**―キューブ**《ice cube（立方体）》立方体の氷片。**―クリーム**《ice cream》氷菓子の一種。牛乳・砂糖・卵黄を混ぜ合わせて香料を加え、クリーム状に凍らせたもの。普通、脂肪分三パーセント以上のもので、アイスキャンデー・シャーベットと区別する。略してアイス。なまってアイスクリン。**―クリーム・サンデー**《ice-cream sundae》果汁や果物に、クリーム・アイスクリームを添えたもの。サンデーとも。**―クリーム・ソーダ**《ice-cream and soda》アイスクリーム入りのソーダ水。**―クリーム・パフェ**《ice-cream parfait》アイスクリームに果物・チョコレート・生クリームなどを添えたもの。↔パフェ **―コーヒー**《ice coffee》氷を入れた冷やしコーヒー。大阪ではコールコーヒーとも。↔ホットコーヒー **―ショー**《ice show》氷上で行なう見せ物。スケーターによるダンス・劇・曲技などがある。**―スケート**《ice skating》氷上滑走。スケートくつをはいて氷の上をすべるスポーツ。スケートとも。↔ローラースケート **―スマック**《ice smack（風味）》薄いチョコレートで包んで筒状その他の形にしたアイスクリーム。スマック。**―せんりょう**〔染料〕もめんを染める染料。布を下漬剤に浸し、次に顕色剤に入れると水に溶けない色が現われて染めつく。このとき氷で冷やして反応させるのでこの名がある。氷染め染料。冷染染料。**―ダンシング**《ice dancing》スケートで、フィギュア競技の一種。男女が対(ペア)になって氷上を音楽にあわせて踊るように滑る競技。**―ティー**《ice tea》氷で冷やした紅茶。**―テクニック**《ice-technique》登山で、氷や固い雪の上を登り降りする技術。**―ハーケン**《ディ Eishaken＜Eis（氷）＋Haken（くさび）》登山で、氷壁を登り降りするために打ちこむくさび。略してハーケンとも。↔ロックハーケン **―バーン**《ディ Eisbahn（スケート場）＜Eis（氷）＋Bahn（道・表面）》氷化した雪面。一度溶けたり、踏み固められたりした雪面が凍りついた状態のもの。**―ハンマー**《ディ Eishammer＜Eis（氷）＋Hammer（槌）》登山で、アイスハーケンを打つのに使う鉄製のハンマー。**―ピック**《ice pick》氷を砕く、台所用の錐。**―フォール**《icefall（氷の滝）》氷河の急傾斜の部分が、崩れ落ちる氷塊で滝のようになっている危険な場所。氷瀑。**―ボックス**《icebox（氷箱）》㊀氷を使って冷やす冷蔵庫。冷却装置付きの冷蔵庫や氷室は、リフリジレーターという。㊁とくに、携帯用の簡易冷蔵箱。**―ホッケー**《ice hockey》氷上ホッケー。スケートくつをはいて氷の上でするホッケー。一チーム六人。一九二一年(大正一〇)ころ、わが国でもチームが誕生、二四年に長野県の諏訪湖で初の公式試合が行なわれた。**―リンク**《和＜ice＋rink》(ローラースケート場に対して、氷のスケート場。スケートリンクとも。

あい・ず〔合図〕ル 前もって決めた、ことば以外の方法で、物事を知らせること。また、その方法。

あいずかわ・し〔形シク〕〔古〕あいきょうがある。おもしろみがある。「あめなどは似通ひ給へりけるが少しにほひありて、―しきやうにぞおはしける」〔今鏡・六〕

あい・すま・ぬ〔相済まぬ〕〔連語〕《「済まぬ」のやや改まった言い方》㊀そのままにはしておけない。「その程度にては―事情これあり候」㊁すまない。申しわけない。「まことに―ことにて」

あい・ずみ〔相住み〕一つ所にいっしょに住むこと(人たち)。同居。「ずみ。

あい・ずみ〔藍墨〕アイを固めて作った墨。あお

あい・ずり〔相掏〕〔古〕悪事を働く仲間。共犯。ぐる。「あおずり。

あい・ずり〔藍摺〕藍で模様をつけた布や絹。

あい・する〔愛する〕〔他サ変〕〔文語 愛・す（サ変）〕㊀男女の間で愛情を感じる。恋しく思う。㊁親子や師弟の間で)かわいいと思ったり、敬愛の気持をもつ。㊂親愛の情を持つ。「―！「仁者は山を―・す」「君子は日を―・す」㊃好む。㊄称美する。「酒を―・する」㊅たいせつにする。惜しむ。

あい・せき〔相席・合席〕ル〔飲食店などで〕見知らぬ人と同じ食卓にすわりあうこと。

あい・せき〔哀惜〕ル〔人の死などを〕悲しみ惜しむこと。「―の情に堪えない」

あい・せき〔愛惜〕ル なれ親しんだものを、手放したり傷つけたりするのを耐えがたく思うこと。

あい・せき〔相関〕もと、すもうで、大関の中で下位のもの。今の「張出し大関」にあたる。

あい・せつ〔哀切〕〔名・ニ形動〕非常に哀れで、もの悲しいこと。「―きわまりない」

あい・ぜつ〔哀絶〕非常に悲しいこと。

アイゼナハ・こうりょう〔アイゼナハ綱領〕一八六九年、ドイツのアイゼナハ(Eisenach)で出されたドイツの社会民主党(のち社会民主党)の結成宣言。

あい・せん〔相先〕碁・将棋などで、互いに先番となること。また、互いに同じ程度の技量があることと。互い先。

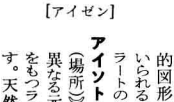
あい・せん〔間銭〕〔古〕手数料。口銭。

あい・ぜん〔愛染〕〔仏〕㊀愛着の汚れ。愛の執着心。㊁愛染明王。**―ほう**〔法〕密教で、

愛染明王を本尊として、無事・幸福などを祈る秘法。**—みょうおう**〔—わうワ〕〔明王〕愛欲をつかさどる明王。全身赤く、目が三つ、腕が六本、怒りの相を表わし、頭に獅子冠(ししかむり)をいただき、弓矢を持つ。近世では恋愛の神とし、また水商売の女などに信仰される。愛染王。

[愛染明王]

アイゼン(〈ドイ〉Steigeisen)鉄かんじき。登山ぐつの底につける滑りどめの金具。


[アイゼン]

アイゼンハワー・ドクトリン(Eisenhower Doctrine〔教義・信条〕)米国のアイゼンハワー大統領が、一九五七年一月、議会に送った中東問題に関する特別教書。また、その骨子となっている考え方。ソ連の侵略阻止、中東諸国に対する経済援助を主眼とする。

あい・そ〔哀訴〕ス〔—〕嘆き訴えること。哀願。

あい・そ〔愛想〕(〈あいそう〉の転)㊀にこやかで人好きがすること。「—のいい人」㊁人に対して好意や愛情を示すこと。「—のない返事」「—が尽きる」㊂もてなし。供応。「何のお—もなく」㊃ス〔—〔おの形〕〕料理屋などで、勘定のこと。**『—が尽・きる』**好意が持てなくなる。**『—もこそも尽き果・てる』**〔—こそも〔は〕あいそも〕と口調をそろえたもの〕→あいそが尽きる〔今までは好意を持っていたが〕いやになって相手にしない。**—づかし**〔—〔尽かし〕〕あいそが尽きたときに示す、つれない動作(ことば)。「—をする〔言う〕」**—わらい**ラ〔—〔笑い〕〕あいそ㊁に笑うこと。また、その笑い。あいきょうわらい。

あい・そう〔愛想〕〈愛想〉→あいそ

あい・ぞう〔愛憎〕愛することと憎むこと。また、その気持。「—相半ばする」

あい・ぞう〔愛蔵〕ス 大切にしまっておくこと。

あい・そく〔愛息〕かわいがっているむすこ。他人のむすこにいう。

アイソスタシー(isostasy〈ギリ〉isostasis〈ギリ〉isos〔平等な〕+stasis〔平衡〕)地殻均衡。地殻内部の構造を重力に関係づけて説明する理論。地殻はその下のより密度の高い層の上に浮いているようなもので、表面の高いところほど、その下部の地殻も厚く、低いところの地殻は逆に薄いとする。

アイソタイプ(isotype〈ギリ〉isos〔同じ〕+topos〔場所〕)同位元素。原子番号が同じで質量数の異なる元素。水素と重水素など。普通、放射能をもつラジオ・アイソトープ(放射性同位元素)をさす。天然と人工とがある。とくにアイソトープであることを示すときには、Hのアイソトープ重水素を^{2}Hとするように、元素記号の肩に質量数を記入する。

あい・そめ〔藍初め〕〔逢初め〕(男女が)初めて逢うこと。

あい・ぞめ〔藍染め〕アイで染めたもの。

あい・そめつけ〔藍染め付け〕→そめつけ㊁

あい・そん〔愛孫〕かわいがっている孫。他人の孫にいう。

あいだ〔間〕〔—〕㊀(名)㊀隔たりのある二つの物(事)の中間。うち。「隣の町との—に川がある」「休みの—に本を読む」㊁すきま。ひま。「戸と戸の—」㊂隔たり。違い。「妥協するにはまだ—がある」㊃とき。おり。「だいたいの時をさす。「このあいだ—ください」㊄関係。間柄。「夫婦の—」〔—〕㊁(接助)原因・理由を表わす。「…から」「…ゆえに」「…ので」の意。「拙著一部お送り申し上げ候—、貴下の御高評たまわりたく、よろしくお願い申し上げ候」(現代語では、主に手紙文などの候文に用いられる。古語では、「候」のほか、他の動詞・助動詞などにも付いて、ほぼ広く用いられた)**—がら**〔—柄〕㊀(両方の)関係。つづきあい。「ふたりは親子の—だ」㊁つきあい。仲。「あのふたりの—がよくない」**—ぐい**ぐ〔—食〕一定の食事のとき以外に、物を食べること。間食**よ**〔—夜〕〔古〕契った男女の会うことがときれた夜。

あい・たい〔—〕〔—〕(形動)雲のたなびいているさま。㊁(名)老眼鏡の別称。

あい・たい〔—〕〔相対〕㊀他人を入れずに、ふたりだけで事を行なうこと。「—で話し合う」㊁〔古〕相談して事を行なうこと。合意。「これはお前と私との事でござるによって」〔狂・雁大名〕**—じに**〔—死に〕〔江戸時代の語で〕心中(しんじゅう)。**—ずく**ず〔—〔尽〕〕〔相談のうえ〕売買すること。合意。**—そうば**ば〔—〕〔相場〕売買するふたりが約束して定めた相場。**—ばいばい**〔—売買〕売手と買手が、仲介なしにふたりだけで条件を決めて売買すること。

あい・たい・する〔—〕〔相対する〕〔自サ変〕㊀互いに向かい合う。㊁互いに反対の立場にたつ。

あい・たがい〔相互い〕〔両方で代わり代わり合うこと。お互い。両方。**—に**(副)お互いに。ともに。かわるがわる。

あい・たけ〔藍茸〕㊀マツタケ科のキノコ。色は白く、かさの表側だけが緑色がかっている。夏の終りころから山野に産し、食べられる。なつあいたけ。㊁山陽地方で)ハツタケの異称。

あい・た・しゅぎ〔愛他主義〕他人の幸福の増進を道徳上の行為の標準とする主義。利他主義。↔利己主義

あい・たずさえ・て〔相携えて〕〔副〕手をつないで。いっしょに。協力して。

あいだち・なし〔—〕〔形ク〕〔古〕㊀隔てがない。遠慮がない。「—き御事どもなりや」〔源・蜻〕㊁ぶあいそうだ。つれない。「心よからず—・きものに思ひ給へるへ、わりなしや」〔源・夕霧〕

あい・たで〔藍蓼〕〔藍建て〕アイ㊀の異称。

あい・だて〔藍建て〕染色に使うため、水に溶けないインジゴチン(アイの主要色素)を可溶性にする方法。

あいだて・なし〔—〕〔形ク〕〔古〕㊀(〈あのだちなし〉の転か)㊁ぶしつけだ。無遠慮だ。無作法だ。「—しども狂気とも笑はば笑へ」〔近松・用明天皇職人鑑〕㊂不相応だ。分別がない。とほうもない。「あんまりに母が—いごうばりが強ういよいよ心が直らぬ」〔近松・女殺油地獄〕

あい・だな〔相・店〕→あいどやや(相借家)

あい・だま〔—〕〔藍玉〕染料の一種。アイの葉をかわかして少し水を混ぜ、ついて丸く固めたもの。

あい・だ・る〔愛垂る〕〔自下二〕〔古〕甘ったれる。恥ずかしがる。はにかむ。あまの子なればとて、さすがに打解けぬさまいと—・れたり」〔源・夕顔〕

あいたん・どころ〔朝所〕(〈あしたどころ〉の転)太政官(だじょうかん)庁の東北にあった建物。参議以上のものが食事をし、また政務を執った所。あしたどころ。あいたどころ。

あい・ちゃく〔愛着〕ス かわいくて離れたくないこと。あいじゃく。「使い慣れたカメラに—を覚える」

あい・ちょう〔哀調〕もの悲しい調子。歌や歌い方の悲しい調べ。「—切々たるものがある」

あい・ちょう〔愛重〕ス 愛し重んじること。たいせつにすること。「一の念」

あい・ちょう・しゅうかん〔愛鳥週間〕鳥を愛し、特に林野の害虫を食う野鳥を増やすのが目的。五月十日から一週間。バードウイーク。

あいち・ようすい〔愛知用水〕愛知県に建設された人工用水路。木曾川(きそがわ)上流の水を知多半島突端まで引き、農業用・工業用・上水道用とするもの。幹線水路一二二キロ。一九六一年(昭和三十六)完成。

あ・いつ〔彼奴〕(代)(〈あやつ〉の転)㊀あのやつ。あの人。㊁(親しみをこめて)使う場合と、見下して使う場合とがある)「—はいいやつだ」「—の顔が見たいものだ」㊂(「あれ」の意の乱暴な言い方。「—が食いたい」**—ら**〔—〕(等)あいつ㊀の複数。

あいづ〔会津〕福島県西部、会津盆地とその周辺地方の通称。**—ごよみ**〔—〕暦〕昔、会津地方で通用した絵暦の一種。**—ぬり**〔—塗〕会津地方で作られる漆器。天正年間(一五七三)蒲生氏郷(がもうさとと)の奨励によって始まった。**—ばんだいさん**〔—〕磐梯山〕㊀磐梯山。㊁福島県会津地方の民謡。「会津磐梯山は宝の山よ、笹ささに黄金がねがなり下がる。…小原庄助さん、なぜ身上しんしょうなくした、朝寝朝酒朝湯が大好きで、それで身上なくした」**—ふじ**〔—富士〕磐梯

〈 は常用漢字以外の漢字　〈〈 は常用漢字の音訓表にない音訓　〈〈 はかながきにしてもよい

山(はいさんどん)の別称。会津根。**―やき**[―焼]会津地方で作られる磁器。正保年間(一六四四―四八)保科正之(まさゆき)が焼かせたのに始まる。茶器類が多い。**―ろうそく**[―蠟燭]会津地方で作られるろうそく。質がよく純白で、花模様などを描いたもの。

あい・つう[哀痛]スル 悲しみ嘆くこと。

あい・つ・ぐ[相次ぐ](自五) あとからあとから―続く(起こる)。「―ぐ事故」「―いで到着」

あい・づち[相・槌]相(鍛)冶(ち)で、互いに打ち合わせるつち。むかいづち。『**―を打・つ**』人の話に調子を合わせて受け答えをする。

あい・づま[相・褄]えり先の所のおくみの幅(の位置)。

あい・て[相手] ㊀向こうの人。いっしょに事をする人。また、相対して争う一方の人(側)。先方。「話―」「碁の―」「―が悪い」「―チーム」㊁いっしょに事をすること。先方につきあうこと。また、相対して争うこと。「お―をする」『**―変われば主(し)変わらず**』相手は次々に変わっても、これに対するものは同じであることにいう。『**―のさする功名**』相手がわざと負けたり、思わず負けたりすることによって、思いがけない勝利を得ることにいう。**―かた**[―方]㊀相手にあたる人。㊁法律上の行為に関係のある一方の当事者を、他の当事者に対して呼ぶ称。**―ごのみ**[―好み]相手をそれと名ざして望むこと。**―しだい**[―次第]相手のやり方によって自分の方法・態度を変えること。「―でどうにでもなる」**―ど・る**[―取る](他五) 相手と相手しだい。**―ず・く**[―尽く](他五) 相手とする。「国を―って訴訟をおこす」

アイディア《idea＜ギリシア形》㊀物事のやり方などについて思いついた独創的な考え。「―マン=何カニツケテイイアイディアノ出セル人」㊁文学で、作品の構想。㊂→イデー

アイディアリズム《idealism》㊀〔哲〕観念論。㊁理想主義。

アイディアル(ニ形動)《ideal》理想的な。空想的な。また、典型的な。

アイディル《idyl＜ギリシア eidyllion(小さな形)》㊀文学で、田園詩。牧歌。また、田園文学。㊁〔楽〕田園曲。牧歌的な情景を描いた曲。⇨パストラル

あい・でし[相弟子] 同じ先生について、いっしょに学ぶ人。

アイテム《item(項目・細目)》電子計算機で、磁気テープに記録されている一件分のデータ。

あい・でん[相殿] あいどの。

アイデンティティー《identity＜ラテン idem(同じもの)》心理学・社会学などで、自分は自分以外の何ものでもないということ。自己の存在証明。「―カード(=身分証明書)」

アイデンティファイスル《identify》その人(物)が、まさにその人(物)にちがいないことを確認すること。

あい・とう[哀悼]スル 人の死を悲しむこと。「―の意を表す」

あい・どく[愛読]スル 特に好んで読むこと。「―書」

あい・と・にんしき・と・の・しゅっぱつ[愛と認識との出発]倉田百三の論文集。一九二三年(大正一二)刊。旧一高在学中から三十歳ごろまでの間に書かれた論文・感想等を収める。利己主義と愛の矛盾との悩みが、西田幾多郎の「善の研究」を読んでだいに宗教的ヒューマニズムにめざめていく思想的過程が描かれている。

あい・どの[相殿] 同じ神社に二柱以上の神を合わせてまつること。あいでん。

アイドマ・の・ほうそく[アイドマの法則]→AIDMAの法則

あい・とともに[《相共》に](副) いっしょに。

あい・どり[相取り] [古] ㊀物事をいっしょにすること。「いずれも人々―に誦しけり」〔著聞・五〕㊁共謀して悪事を働くこと。「この人置きの―さんとては、にくし」〔西鶴・織留〕

アイドリング《idling》スル 機械、とくに自動車のエンジンを空転させること。 回転数調査の基準とする。遊転。

アイドル《idol＜ギリシア eidolon(像)》㊀偶像。崇拝される人、または物。㊁人気者。「―歌手」

アイドル・システム《idle(仕事のない・遊んでいる) system》〔経〕不況あるいは受注低下時の切りぬけ策の一つ。操業や労働時間の短縮により、人員整理を避ける代りに、賃金を下げること。

あい・なかば・する[相半ばする](自サ変) 半分半分である。「功罪―する」

あい・なげ[相投げ] すもうの手の一つ。相手が投げを仕掛けてきたとき、逆にこちらからかたを押しつけていって背負い投げにするわざ。

あい・なし(形ク) [古] ㊀おもしろみがない。好意が持てない。あじきない。「梨の花…げに、葉の色よりはじめて―く見ゆるを」〔枕・三七〕㊁不本意だ。うれしくない。「―・かける心くらべどもかな」〔源・夕顔〕㊂《連用形を用いて》なんというわけもなく。むやみに。「頭の中将を見給ふにも、―く胸騒ぎて」〔源・夕顔〕

あいな・だのみ[あいな頼み] [古] あてにならない頼みゃ。また、限度を越えた期待ともいう。「つひにはと、―し侍りつるを」〔源・葵〕

あい・なめ[《鮎》並・鮎《魚女》] アイナメ科の近海魚。体長約三〇センチ。形はスズキに似ている。あぶらめ。あぶらこ。

あいなめ・し[《藍草》] →あいがわ

あいなめ・の・まつり[相(嘗)の祭り] →あいんべのまつり

あいなるべく・は[相成るべくは](連語)《やや改まった言い方》もしできることなら。

あいにえ・の・まつり[相(嘗)の祭り] →あいんべのまつり

あいに・く《生憎》(副・ニ形動)《「あやにく」の転》おり悪しく。タイミング悪く。「―の(な)天気です」「―留守にまして」「お―さま」

アイヌ《Ainu＝人》(「お―さま」)現在、北海道に住む、東アジアの一民族。かつては千島・カラフトさらに本州東北部にも居住しており、蝦夷(えぞ)あるいは夷(えみし)とよばれた。本来は狩猟・漁労生活を営み、農業をしらなかった。幕藩体制下で完全に和人(内地人)のしたがった支配下におかれ、明治期の同化政策をへた今日では固有の言語や文化・風習も失われ、混血も進んだが、現実生活での民族差別はなくなっていない。

あい・ねずみ[藍鼠] 藍色がかったねずみ色。

あいのう・しょう[《藍嚢》鈔]僧行誉(ぎょうよ)編の考証書。七巻。一四四六年(文安三)成る。仏教・世俗に関する和漢の故事五百余について、その出自や語義などを考証したもの。⇨塵添(じん)壒嚢抄

あい・の・きょうげん[《間の狂言》] ㊀能楽一曲の中で、シテ・ワキ・ツレ・子方などのほかに狂言師が勤める演技。あい。㊁あやつり人形で、一浄瑠璃(じょうるり)の段と段との間、または、一浄瑠璃と一浄瑠璃との間のつなぎに道化あやつり・のろま人形を演ずること。間狂言。㊂歌舞伎(かぶき)・芝居で、十一月の顔見世狂言と翌年正月の二の替りの間に演ずる狂言。

あい・の・くさび[《間の楔》] ㊀木材と木材との間に打って、両方をつなぎとめるくさび。㊁事の暇に他の事をすること。

あい・の・こ[《合いの子》・《間の子》] ㊀異人種間、または異種の生物の間に生まれた子。雑種。《人に対して用いられるとき、さげすみの感じが含まれる》㊁どちらともつかない、あいまいなもの。**―ぶね**[―船] 日本式と西洋式とを取り混ぜて作った船。

あい・の・しゅく[《間の宿》] [古] 宿場と宿場との間にある茶屋や宿屋。

あい・の・す[愛の巣] 愛し合っているふたりが住む家を、鳥の巣にたとえていう語。多く、新婚の家庭をいう。

あい・の・つち[相の(槌)] →あいづち

あい・の・つなぎ[《間の(繋)》] ㊀物と物との間をつなぐもの。㊁ある事の暇に他の事をすること。

あい・の・て[《合いの手》・《間の手》] ㊀邦楽で、唄(うた)と唄との中間に伴奏楽器だけで奏される部分。「―を入れる」㊁他人の話の間にさしはさむことば。

あい・の・ま[《間の間》] ㊀[相の間・合いの間] おもな二室の間にある室。㊁権現造りなどで、本殿と拝殿との間の部分。㊂仕事がなくて暇なとき。㊃京都(うずまさ)と田舎間(いなかま)との中間の広さの間。㊄

あいのやま・ぶし[《間の山節》] 寛文・延宝のころ(江戸初期)、伊勢(ぜ)の間の山で、お杉・お玉という物ごいの女が歌い始めたという哀調を帯びた

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com